

今日無事

堀江重郎
画・吉野晃希男

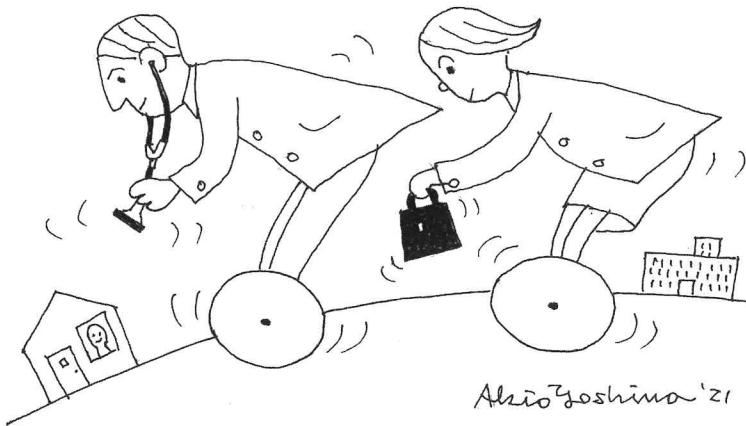
好きな言葉は何ですか?と聞かれるといつからか、「今日無事」という言葉がしつくり来るようになつた。

「今日無事」は作家の山口瞳が好んだ言葉である。彼の『行きつけの店』(新潮文庫)にも「今日無事」と揮毫した暖簾の写真があるし、色紙にも好んでこの言葉を書いたといふ。山口瞳は、「圭角のある人」だろう。言いにくいことを口にする。するいこと、節度のないことを嫌う。こういう人は世間では煙たがられる。しかし、そういう「角」を尖らせておけたことこそが、彼の天賦の才だろう。その山口瞳が晩年にようやく角が取れて丸くなつた末に、「今日無事」に至つたということに、いささか彼に似たところがある自分は共感をしている。

医者の毎日に、病気やけがを治している時間というのはわずかしかない。大部分の時間は、次に会う時まで達者でいてほしいと祈ることに費やされている。がんがたまたま発見されて手術を受けた後に時間が経つて再発の心配もなくなり「もう卒業ですね」という時の患者さんの顔を見るのは嬉しい。医者のほうも「無事」を未来まで願わなくてよくなるからである。そもそも私は、そう遠くまで祈りを届けるほどの力もない。そこで、とりあえず無事な今日を一日ずつ重

ねでいってほしいと祈つてゐる。
この毎日の無事を専ら
析る医療が在宅医療である。医師が患者宅を定期的に訪問するシステムは
実は世界でも珍しい。医師、看護師、介護士といつた多職種がフラットに関わり地域を支えている。二十四時間対応をする在宅医を志す医師も
年々増えている。このコロナ禍にあつても懸命な努力で在宅医療がクラス化していなければ驚くべきことである。

十年前、大学病院の泌尿器科の主任になつて、



自分たちが診るがん患者のうちせめて近くの人だけでも、最期まで診療をしたいと思い、在宅医療を始めたことにした。在宅医療は体温計、血圧計に聴診器くらいしか診断機器がない、ローテクの医療である。大学病院の医師が在宅医療を担うことに、泌尿器科のチーム内でも当然反対があつた。何とか同僚を説得してスタートした。われわれの最初の在宅患者は、膀胱がんの転移にする抗がん剤治療が効かなくなつた高齢のかたであった。無口で病院の大部屋のベッドに小さくなつていた人が、経営

する工場の隣にある自宅に戻つてからは、家族や社員の声や工場から聞こえてくる作業音を聞いてすっかり元気になり、週単位の命のはずが数か月も元気で過ごされた。在宅で患者さんが亡くなるのを見届けることを「看取り」と呼んでいる。病院には死期を知らせる心電図モニターがあるが、自宅には標となるものは何もない。患者さんが眠りがちになり、いよいよ旅立ちが近いと思われたころ、私はご家族に集まつてもらい、亡くなるまでどう呼吸が変化するかをお話した。実は私自身にもこのような話をるのは初めての経験であつたが、話を聞いたお子さん、お孫さんは、交代で寝ずの番をしながら、呼吸が止まつたことを見届け、われわれにご連絡をいただいた。病院での死亡はご家族の強い悲しみや喪失感に医師も打ちのめされる。しかし在宅での臨終では、ご家族には天命のままに看送つたという達成感があり、私たち俄か在宅医のケアにも心から感謝していただいた。この経験が在宅医療をしようというチームの心を固めてくれた。

在宅医療では「ごめん下さい」と頭を下げて訪問する。患者さんやご家族がお茶をふるまつてくれる事もあり、ゆっくり話す事もできる。なにより全身を丁寧に診察することで自然に医師の五感は研ぎ澄まされてくる。病院で生かされていた人が自宅で生きる力を得ると、医師の見立てが外れる事もある。病院で入れられた胃瘻や尿カテーテルが不要になるのも珍しくない。今年になつて在宅医療をテーマにした二つの映画が評判になつていて、二月から公開されている高橋伴明監督の「痛くない死に方」は、尼崎の「町医者」でこれまで一五〇〇人以上を在宅で看取つてきた長尾和宏先生をモデルにしている。長尾先生から「観てや！」と言われて、久方ぶりに映画館へ行つた。長尾先生を奥田瑛二さん、がんの終末期の患者を宇崎竜童さん、奥さんが大谷直子さんという素晴らしい配役。柄本佑さんが、頭でつかちの「痛い医者」が患者の価値觀

を大事にする在宅医に成長する主人公を好演している。在宅医は自分の感覚と経験だけで素手の医療をしている。私がこれまで出会つてきた在宅医は、長尾先生含めサムライが多い。もちろん圭角がある人ばかりである。病者へのまなざしは優しいが権威とかガイドラインとかをものとしない人が多い。

もう一つ、ゴールデンウイーク後に公開されるのが、成島出監督の「いのちの停車場」。こちらは大学病院で救急医療を担つていた医師が故郷で在宅医療をする話で、南杏子さんの原作も、終末期医療のみならず、老々介護、安楽死など今の医療の現実と倫理の矛盾をついて読みごたえがある。映画は主演が吉永小百合さん、在宅診療所の所長が西田敏行さん、さらに松坂桃李さん、広瀬すずさんという豪華なキャスティングで、公開が待ち遠しい。先日、日本対がん協会のイベントに、がんの在宅医療経験者ということでお声がけいただき、成島監督、そして対がん協会理事長の垣添忠生先生と座談会をさせていただいた。成島監督は、なんだか羅漢さんのような剛毅朴訥な人で、自身映画の撮影前に、がん宣告を受け闘病ののちにメガホンをとつたことを伺い、この映画への想いを強く感じた。

「今日無事」とは安心立命を願う境地だと思っていた。しかし念のため調べてみると、「無事」は禪の言葉で「求心歇む処即ち無事」（臨済録）、つまり「あるがままの自分でいること、外に価値や承認を求めるだけでなく、自分の中に仮性を見出すこと」という意味であることを知つて驚いた。山口瞳は、「今日無事」という角だけは丸くしたくないと願つていたのだろう。そして在宅医とは、一人一人の「今日無事」を身近で看守つている医師だと思う。

「痛くない死に方」「いのちの停車場」ぜひ映画館へお出かけください。

（泌尿器科医）

2021

かまくら春秋 5

No.613

- 司葉子×伊藤玄二郎「過ぎ去つた時」
連載小説「ゆれる階」
村松友視
新連載「食の森羅万象」
小倉和夫
横田南嶺「心をたがやす」
13人の鎌倉時代
二階堂正宏
堀江重郎「三階から目薬」
好評連載
横山泰子「こころにひかる物語」
山口道孝
鶴沼物語
太田治子「こころにひかる物語」
金澤泰子
辰巳芳子「こころにひかる物語」
近藤誠一
原田允裕
松下千春「新茶も青草の香り」
野口哲
高橋寛
森下春ほか
木下すみれ子
沼田美穂
卓



湘南いい店ガイド付

定価360円
(本体327円+税)